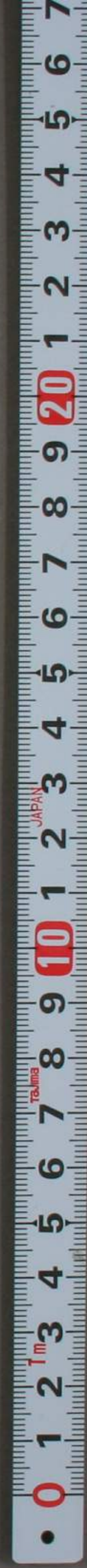
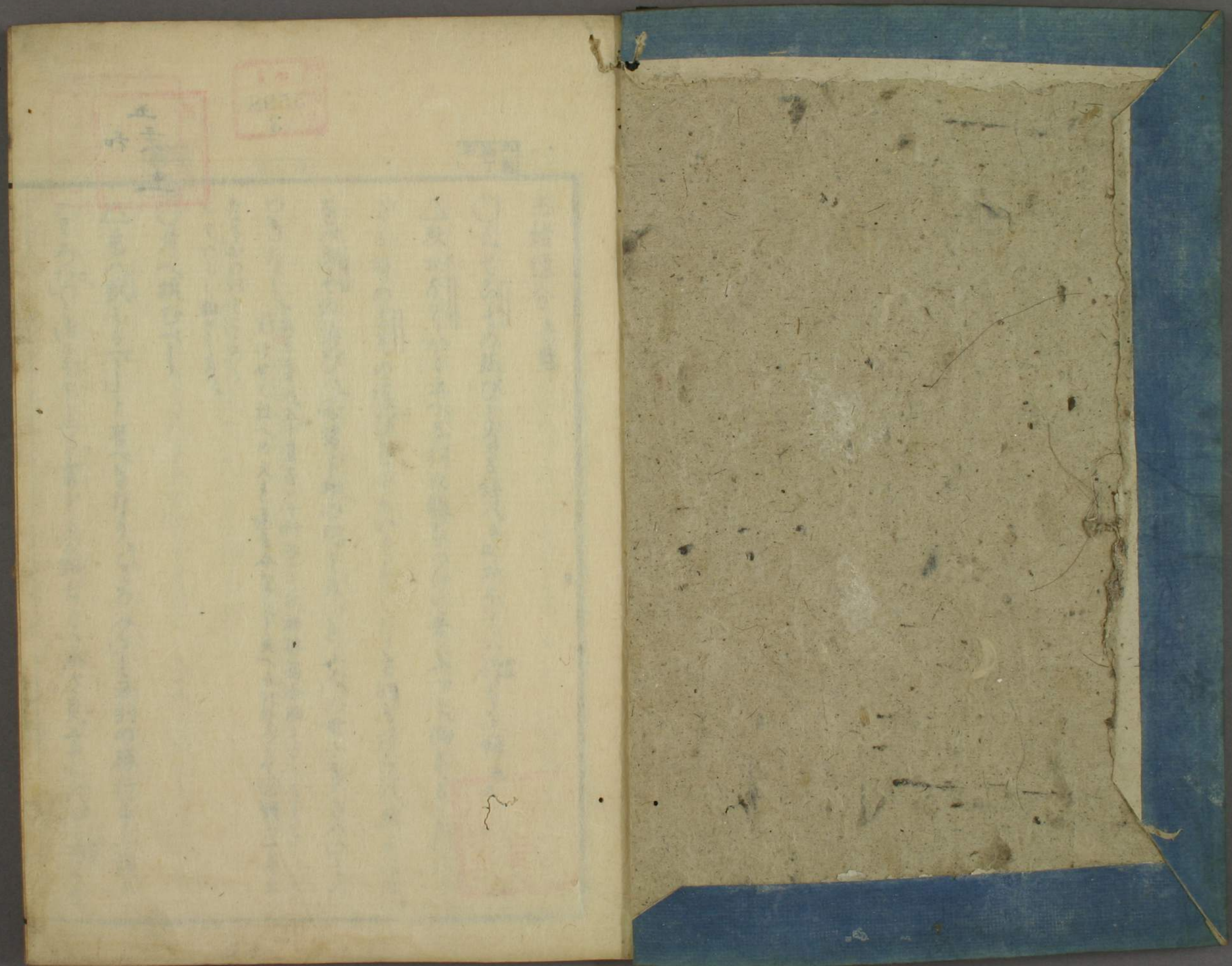


ホ 2
5598
3





和
五
冊
號
函
土

門ホ2
號598
卷3

五卷
初丁
右

玉緒線分 中巻

○んて あ そ の 結 び と あ る 辞 ハ 云 云 お お 不 く ハ 作 さ る 辞 云



△次 お 不 く ハ 云 へ る 詞 に 眼 を つ け て 考 ふ べ し 仰 さ る コ は 何

ざる辞のあ そ の 結 び な ら る も い と も く な き に も 何 ら ん 然 る に 次

をバ あ そ の 結 び ハ 必 皆 ト 知 の 詞 と 云 ひ あ ふ 人 の 世 小 多 き ハ い と ん

つきなし ある書に五十音を八十行なぐに初解用令助くころるしくころえ

えけせてねへめえき返を合なりと云へるにたぐいて(五)韻の十音をこ

な下知の詞ところる

○考へ試むべし

△是 ハ 試 さ る べ し と 有 べ き な り 何 ら み と 云 詞 の 麻 行 中 二 段 ヲ

くろむ と活らるて正き書ども の 証 古 く ハ 未 だ 見 當 ら ん や 何 ら と



細音

の世のりの一ハをりくこゆれどそれより一ハ云がさからん、山口某小例を以て
其活さま畧國の趣き、そもかる詞の活きのりの損ひハ、鈴屋集・記傳等に
委しく論ぜりてたり、

まゝをりくあたなり、いんやて小をは小うときせの奇よりのまゝる
一ハ、尋おも少ういふ、文一ハいと夥きたなり、

○又今の世は俗傳にて小をたぐそも、あその結びたうをけ、云

△坎処ハ、おのづか雅言の格と云あゝぬもおか、と松に云て有べ
し、皆とハ云難きを坎処の云ひさまの如くしてハ、初学子思ふたが有る
者、うらん、抑あその結びよ、俗語ならぬ分のや古きにき、坎丁その
かりのいりよぞや、賞ゆる多かることを坎毫のたぐ、^{十丁}に即ゆつる坎
観ても熟く意を用ひて古への正きを学ふべきことを思ふべし、

○いひりきりて云

△云ひりけりて結べるまそ小凡そ二有、其一ハ云を二づりひて云ひり
くる、即愛に引るがごともの如し、地名のいきし、命の生きし、或ハ山と
止し、或ハ入つと御津とたなり、さて二よけ、是彼の詞二をくぬる
一ハ、いりて、只あその結びをき、いりて云ひりて、をな、其之集にま
ちつけたり、^一あそくるさの波より先、一人のたつらん、と見え
くるなどなり、

○あそ二つある、あそ、いと免づし

△仲文集小、買ふよりのも賣う、こそ、源ハまけ、ち、うへ、こそ、釜のそこ
一有、^底其許とを、^うけたるなり、^是もこそ二あれと結びおのく、らまれ、二つの

こそをきみて一つに結へる例は八日くらぶさで序に云えん文章亦
 こそ二つ有て其結びハ一にたみで結ぶるうと見えざる有枕冊子
 春七 冥白殿の云々をさへハせむハ一宮の太史殿の清涼殿のまへハ
 四丁 たくせむハねをみさせむまききかめりともみらわらさハ一あやみ
 出させむハハふとみさせむハ一こそちあわいうむかりの幕の所行の
 程あらんと又もさるこそいみしかさるこそハ結びハ一つのあら
 るを上なるこそ二つともいづれもああら結びへうらんと云べく
 もらうぬさぬたなりされど万六の長奇なるを爰に申して知つ
 しとあらると全く同じともせぬばこハりくハ程あらん人の
 字ハハ先の字語たらんうた思えら又あらうむハ上なるこそやそ

の誤ならんと極おも思へどハと交る上を又申と人とかある
 極のとも有まやか小く小外にをさへ賞えぬてくあひをるあ
 なるをこの序に爰云て畏き人の評めを期つ源氏若紫 古三 八へ
 丁そはち一有一源氏の君こそおちとされなごあをぬとのまを
 云と有致も考べし かり分と云見所あらぬについで云爰一川なる大系六のこ
 云二句の山を扱才四句の如松をく作る一ちさふそよ
 ○志と丁扱ハ云ハ云云これバ丁扱の下へうりてとの云を加へて
 又きはあはさきめくうねて
 △此志を丁扱文章にも有源氏帚木 湖 十二 ちどくうとぬきり的小
 くもあわさべきあわさきさぬたる志を丁扱契りあるとハ思ひ給え
 識も丁扱の下云脱しと事ハ行末を押料て危むもこそ文章にも用ふ例のかり
 栄花石蔭くみてみるこ悩ましうは是より重らせ難ふやうもこそあれと云止まど

○玉のをり分

○旋三

○二一八さぞくかーとくるさ

△爰小舉する五首の中、金四の、おとよりやかさ中の小世不なく
 きが次さ了そを。かりけんとはくくは。是ハ次なる千六い川のまふ
 うきひ乃あはこちうん。さ了そ。嵐おとのかりく先。新ハなき
 とは面影をのミオイそく。さ了そ。人をあまかろく。ゆたよ云
 へるとハ、あつこれハやそのやうかたりてきこゆる様なりその故ハ
 さ了そと云ひしる末を、らめたと云へるハけ小推しハうりくるときこ
 めれど、凡て將の字に當る詞こそ。つゝり。これハ已然。といへるハそれとけ
 結べばさよく閉ゆるなり。云かるゆゑ。異なるべくおもたる。然もども又よく思ふに、まぐでにあうる詞なが
 ら、よこそその強びとなるハ推しハうりくるころとなれるがまろ

ろしハ、上^{三丁}小あまきく其例のええとる如くなれば、さ了そと云へる
 末を已然言こそ強ぶるも、その例ハ少なられど、推しをる意と
 なるも有るへ、其例をさつらバ補ひ註しせん。
 ○あそとかけそとあつと強ぶ格々。云。け格あは柔よりの
 めて。云。

△あは柔よりのと有を、万葉集の頃小始まれるとく言得語
 くと勿も万葉集に入まるいとあろき歌小ええたと云ふとそ、この
 辞、いとあろくよりの奇のまなと、文よんえとるも久きとる、
 清磨等波奉侍留奴止所念^{天已}姓毛賜豆治給之^可これらなり。
 三十の五丁あ^{右ハ}る宣命あり。^{統紀}

○玉のをくり分

○旋ノ四

○まうかゝる格

△坎まうかハまうまう。まうかゝと活く一つの用云なり、さてそれ

まうハ連用云まう。ハ連躰截断の二をうひまう。ハ已然言なりて

と和語説略図に照して知べし、一卷四十五丁に〇三轉の外といひて、まうと

うゝぬ由、彼処
よ云ることし

○後みぢぢぢぢをうゝ後と又うゝをうゝと亦小ありて「丁そあ」

△坎後撰の奇、ゆゑに「あ」を字誤まれる「ハ」非なり、但

是ハ坎前のうへのこの考なり、「丁そ」と云ひて「あ」を字誤本を

例ハりよりなきことにある、思ひまうべう、後、と云れ小思ひを

さて後六帖をこれバもしてあうりた、たゞ後撰のうゝにつきてかくは

て「アキ」と云つたために入られ、うゝなりんもハうり難

△是ハこれこれ小思ひなるやう、坎処云ひたうむ、抑千十一のうたえ

君小「丁そ」云志、例くたうれ」と云へきをたみ、さて、然るに云

志をバ云ひて、たうりて、終りたる志、例くをのをハ上へ及び

て、いゝれぬるうま」と云処へ連くたるべし、続古十のハ、志に「丁そ」

のまゝをうつろため、然るを冬冬とせ、さういふと云云なるを

うつろふを」と云こみ、成べし、五社百首のハ、多う「丁そ」みやこを

もえるべけれ、然るを神り、故こまちうの「不」云云なるを、言を

たみで、えうへきを「いへる」なり、さればうちまうせを、と終り

云てハいうぐしと思しうと、意ハ右のどくくも現小を云居れた、
坎処の如くいへてもえあらト上、に、坎をハ皆木をの意のなりとぞ
知らる、
千載十一のを始め皆上へ反ると
のこ云まじき故、採よく考べし

○尔と語ぶ格

△是ハ、人志をて「丁」をんと思へ、然る尔と云ひ、月をのこ「丁」を
なが免し、然る尔と云へきを、をらんと思ふ尔と云ひ、なが免し
尔と云るたるべし、

○こまじの尔と力有りて云

△下九小、右のたぐひの尔ハ、ちかゝるて、つみの尔りにあくるなりと云
へると合考べし、かの人のきかく「尔」などの尔とこの「丁」を語ぶ起す

おろろ尔と、その意その勢たかひよらひ似たり、

○ことと交る格

△坎も上に推知まべし、を坎をとひひ尔と云ひ、こをと云ひて、下へ
さゆく云ひつゝ、このこと、文章よ、いと多し、なごころハ右のこゝ
志せらるに、よくせやるなり、

○さそこのわさうへ、○よと交る格と云ふ条を一つ補入るべき故、然

思ふ、榮花物語日蔭、蔓小、村上の先帝と申あう、かの大将のいも
うとの宣耀殿の女御のうみむつり、八宮、こそ、をの志をりのい
みきため、よ、らる處、そのたぬ辞とも云ふまじく、まゝ、脱誤
などならんとも思われむ、かゝる一の格と、きくたさるれを、た、

この格奇こそハ未だこそそれと奇も有りげに思えらる。

○どぞ又どぞとある格

△此どぞハあうもどぞと〜どハふれど〜とみべし。伝説ある格
 のど〜に^丁そあ〜ぬ。然もどぞわがた〜きと今ハ頼まん。道坂と
 何づもぢと^丁そあ〜う。されどあろづ〜結実もぞ有る。とや
 うにいづれもなぞ〜考ふ〜とて序に云らん。秋格五七の字
 ぬさ〜まねるがよの〜と〜思ふ。あ〜う。文書にもた存する
 例^十らり。枕冊子春曙五の加やうの事^丁そか〜と〜し〜きりり
 うち小入つ〜れどなれ〜と〜作もハい〜とせん。と〜え
 るな〜たりり

○あそので小をば〜のもさるる

△後接^十の奇ハ、つ〜れ〜と^丁そは〜は〜のえあれ。然る小その
 口のも小か〜や人をあ〜る〜人。新拾遺^十のハ、かり^丁そと
 れおくの〜あれ。然るふそのあ〜り〜と〜る〜人や接ま〜と
 人〜と云へる〜るなるを、是らも詞をた〜と〜みて云へる。りのとこ
 バよからんとあ〜ハ、な〜なるが〜と〜や。かよ〜に〜のえさ
 とハおも〜れぬなり

○六帖あむといひて云

△これハ、ま〜れ〜を写〜語りて、ま〜れる〜とせらならん。かあ
 どか〜つ〜り〜に味ひ〜れバ、さ〜にてハ何〜た〜あ〜ハウにきこ
 あハ、ま〜つ〜ま〜れ〜り〜の〜と云ま〜と、被〜を〜えの〜は〜と云

みまどひけるよとくもむら也と云へるたふひの变格とて、こまこか

くろとハ物せしにてそ、得いたをひりて「**来**」を一の格と云ともそれと云へたるにあらぬや、

〇^{日記}其蛉 兼代をよびふまへのあひて「**や**」若がつらるよまひなるべし

△つら考るに、**か**ハ^オに自らたる一つの变格と云へし、**か**玉緒ニ

九丁十 ^マへ^マ然云て出しをよみん、七卷小兼代兼光中てふをけらる

つら^アとあて奉りたれど、万葉十口の廿七小、たくみとぬあふ風

乃^タ^ハ神もへどもところが^オおそきの^ラらうつ^テやえ^タと有るべし^志。

と云ひて「**や**」と截ること^バを結べるよとて、これぞこの「**お**」の子

「**や**」と云ひて「**た**」とてむら一つの例ある古き証と云ひ

つべう思われぬがし、ふねおのや何の語なる詞をまれの、たこの語とよみつねはたこの語の未たる截断云をまれの、おそのや何の語ひと

〇兼光玉 のかがや わり色也云云

△**か**之のちての句ハ、**か**神^カか^カも^カに^カ有^カを^カ写^カし^カ誤^カま^カら^カし^カハ^カあ^カ

ざるりこれハ上のまづおそき^カの並^カハお^カも^カれ^カむ、^同一^一の事有^カ

いひがなれど、六帖の^カの^カの^カ、^カと^カ八^カ等^カあ^カが^カさ^カう^カぞ^カお^カも^カも^カ、

〇^カと^カハ^カも^カさ^カべ^カく^カ云云

△^カと^カハ^カ截^カ断^カ言^カを受^カる^カ定^カ例^カな^カれ^カど、^カ稀^カハ^カ变^カ格^カと^カ云^カべ^カく^カ連^カ躰^カ云^カを

受^カら^カる^カ例^カも^カ有^カ但^カし^カ活^カ語^カ雜^カ話^カ(^カ四^カ六^カ)^カの^カ条^カよ^カ云^カ一^カハ^カ宜^カう^カの^カ事^カ有^カ

彼伊勢物語なるありとく^カも^カ云^カら^カる^カ雲^カあ^カを^カり^カの^カ言^カれ^カ下^カハ^カ

本の事云 落^カず^カる^カ如^カも^カた^カゆ^カる^カ瀑^カと^カ有^カよ^カ乞^カ埃^カの^カき^カ類^カの^カ事^カ也^カ

○玉のをらん分

○種八

同各四編八 小諸平の云おこせし事を奉て怠まるが如し但一紫式部集

一折柄を三三落きをうつうき如 きて必しも落し如とていふれは卷十七丁ある合考

○定まぬる格よく切進する格をつくらんと

△次丁に○定まぬる格び辞の格を云と有と、此条と、此類こ
とんをこめて云し、勅もあれこれ互ふうしがる人多り
めり、さそ爰にまづ等々、身に付て因に云ん、おありど色のと
上の句につくべうござんと、古今秋、日らしの晴なるちへ、小日しく
ねぬ、とおのちも山のたもと皆日候万葉よ、殊に多うを、おなくハ
いあふと、別ふと云詞につくらると是也、山家集、月溪ゆゑなる
き月ぞくもりぬるあふのいりく。とのまうれば、此類ハ稀なる

六帖三のせ、大お川せきのあうらひ事、ぬとも我忘らぬ人。とやハ思
ひし、是もい思とハ云ひ下さぬたれど、也ハを隔て、思と云云、
○定まぬる格び辞の云

△二毫のくり分よも云し如く、被みろの原もきを、まほの才四句の
づもえし。この同例たりかのうづつきとせしと有こと、惟も知

まうとかなるをいひし。とせしと書るもの有とされに

の細 云へるか如し、二毫十三丁の標分 一本のあををいへ、いひしとて、丁の標分 一本のあををいへ、いひしとて、丁の標分 一本のあををいへ、いひしとて、丁の標分

定まぬる辞の格をいへしと云へるに似て、さよハ、如 あり、後撰
雅云、あをれてあふかたぐさむ世の万をなど、うらな。といひて、如

らん。百六、一の命いつてもあゝぬをるよちとつじ。とどひ
 おうろ。是らハととるハ定例の截断云を更なるうそ。ちの結
 びハ末なるらんろくちりたぐちと云へるおもつてとる。と
 かり。あまバ殊ハその末ハ連射言つぎなるべきなれどこれ
 らハ右小云如く、かどどうまぐらん。あどどうおうろ。と云ふ照應な
 るぞかし、なほ活語餘論の八巻云
 ○右のあ。ともハ。上。とぞ。や何などの辞あまた。云

九二十

△ちなどと云へるハ、のをこめする。や、此定まぬる結ひ辞の格
 をぬくへて」と云へるハ、のハ殊多し、そのハぞや何よりハや
 程く、はを凌に迫るよ。一巻四十又三巻廿三くり分に云へる趣き

せ考ふべし。今こくに、又若家万葉下巻に山海のあまきとを
 べくはま云々ハ、上。のといひてあまきといふ結ひの格うあひま
 ととかりてきり。耳にさかりてまぐろ。あ。といふ人方ま
 まる。と云へる。あ。耳にさめはハ、即ちのハはもに近きがあなり、
 ちくれどもゆくのハぞや何小類へる辞なればぞや何の本末の結
 と類同せるあん猿多うろく小、その定格をたぐへて、あみるめあ
 うぞ。うふこはる。と。きく。いづくまぞおろりハ。つ。と。人。と。は。ち。を
 との如くに本をの。と云ひて末をきろく詞小て結び、それをと。と
 文うろも、そのぞや何の末をきる、詞小て結び、それをと。と受ふ
 るよりハいしく多うろなり、秋風のあまきぬと。あ。をいづく。あ。味

のみこそ意くかりし也躬怪、是ら皆上小の乃辞にれども、その結
辞の格をたぐへてこと文よりと云べきなりと云也、

○そのまじりこ一古くと一何く一と云

△こま今の世の人のようつうひアヤ懐ちとなり、その毎別殊小よく

あふへし、秋の花又よまかるとして、羽一とく一とみまご

もあうぬ秋のハゆきもやらまばとまるともなり伊勢、あれもあ

くとも来とて一を、往ユカトクと還ユカトクハ、源氏園屋ホ、ゆくとく

せさともめうきほをやさぬしあといハ、うらん一と有も同じ、是

を源氏君と空蝉との往ユカトクと来ユカトクなりとある註ハ、与字の意あること

ハ、必連稱を交る定りと云こと心つうねばならぬ、与字のこま

のたゞバ一と有べきなり、さや、こまの意のこと、詞をへど

てつづけたるゆり、万四妹六がむも解く登結をあま田山今こ

そのみぢちめたるゆり、こハ、ゆくとくゆりぢちむの意なるホ

まを考ふ、序にいんこと二つ有て下に交る処も二つの

こなる、一文章よハ、古今序の、たのままたこ、あふとて、今もま

つとれとて、延延とて、有て、作られ、とつ、なる、とて、とて、

らでも、たなども、凡て上小二つ有て下に一つ小交る文法のこと、

古今集新釋一卷に審らなり、又万九葦屋之宇奈比處女之奥

擲キ平キ往キ來キ跡ミ見ミ者ミ哭ミ耳ミ之ミ所ミ泣ミ、こハ、往ユカトクとて来ユカトクとて、二つび云へ

る、こ、ろ、な、ら、を、ゆ、き、と、と、よ、あり、秋、も、つ、ま、り、ハ、と、その、こと、なり、

○玉のをり分

○権十一

○**と**と**け**さのこ云

とを累きてとといつるハ、いといやうげまでず
ル云々好まうかぬ辭云々

△**坎**雖字の意のこをことのこいづる例や、古くもええづるこ

まであながちにいやし、たきこえむとびひれば、このこづづるこ

とハ、ええぬも心うづなめり、其古きと云ハ、日本紀十「くらがごに

しきのむもをときさけてあまハ泥受迹たむと上の云、是も

数多ハ條むととの意なめり、万葉十一獨寢等菱朽目ハ方あや

むしろ云、同六龍璞之年者竟等敷白之袖易子少忘而念哉の旁々々、仙覺本

く、そのの抄ハいもあることとをこといつるなりと云べきも似たり、尔とせられ

なやよまかへて、袖易子少ハソテカヘレコラと、竟等抄をクルドとよむべしとぞ、抄

ハ壺より濁音字故、これを清音のこにつくると少く、多くハごに用あられ、その例、か

なふもよけれハ、之ハクルトのよミハよく、されバクレトとよみて、こみこを右獨寢等抄

と曰ふことハ又、又古今一本に「たえむハうとく花とみま

るべうとるなり、

「やとみえたる等も」むきに脱誤とのこハ云まできり、あるは万
葉の「とりのぬ」と日本紀の「あまハ孫む」となどに例知するに
云人も不可アラカらさらん歎、さて又、このひてとと云へるに、
こを累きてといふと云へるハあつと云へし、

○古と土あつとむきおひひやな抄とあかきの云

△古今集「ハ人志まぬおひひやなぞ」といれど、今ハ後撰の「

とふと覚えたがへて、や、又ハ古今集に「夫本かたて、や、そハこま

ま、坎なぞ」の助辭とまると、古くハ題注ありより、打聽お

ども然るることなれど、此玉詔と同作の遠鏡小載する横井千秋の

考、らん意よてハ、なぞとハ例なればとハをの誤たるべく、そハか

マ火「うぬぬひのちぞを」など例あればとの意を別あり、

されどそれより一と八思されどもその故ハまゝの例小せるがハ
 おりひの〇と云ひて、〇と云ひてもと云ひ、それへ応じて、〇の川へ浮て
 もやらんと云へるなれば、ゆとりよく潤ひて受ゆるを、此等一本
 の才二句「あゝぬたりひを」とりめり、それこそはいよゝまぞも字
 やまきたり、のよりハおもゆるやと又それよりおもきをそもと
 まりなる辞二つの「やちぞも」より「まよりのまき」といへるところへ
 かゝらんとハ、さる例「りやちつうな」されば、こゝに即ち、六
 帖「ハち小ぞとちぞと」なりといへる、その方によりて、〇も
 ハち小ぞの誤字倒字と、〇「やハち小ぞ」と同じ咎むる処こそきゝるに
 て、さるハ四巻六「小出さる、かまぬ、〇「やちぞ」といひき、〇「やちぞ」とやう

に苗まる歌と同例、なほいと、後撰なる「あゝまき思む」〇「やちぞ」と
 とあゝまぎの孫「なまぎまぎ、あハまき思む」と見え、さるも「あゝ」
 「何ぞとちぞとハちと」同じなれば、と云べうらん、但し、〇「ちぞ」を後撰
 なるハ、こゝに「ちぞ」と、〇「ちぞ」と孫「ちぞ」といふ、さうたす也、りその
 きちち「バつひの」とも、と云へるに、よれり、そこハきこえたれど、
 然るときハ、後撰の歌の「ち」に不審有り、〇「ち」の「ち」の「ち」
 ち、〇「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」
 二巻十「小いさる」の類六「いさる」てよを「不調弄」と云ふべし、やと云
 ちん「小いさる」これを不調とハせど、たう、〇「ち」の「ち」の「ち」
 「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」の「ち」

截る語して「びび」も「と」根「ハ」い「ま」ざり「し」が「は」辰「なり」とも「ま」へ
 き「う」め「し」より「びび」も「と」根「に」云「ひ」て「ハ」一「首」の「お」も「む」き「ま」ろ「く」な「る」
 「ハ」誰「も」知「べ」し「か」く「云」ふ「ハ」後「撰」小「ま」る「れ」る「傍」の「論」め「た」り「か」お「く」
 「に」こ「に」出「せ」る「古」今「の」ハ「初」句「人」ま「ま」ね「し」て「二」句「の」を「ぞ」と「ハ」り「と」を
 小「ぞ」と「こ」に「て」やの「辞」ハ「を」さ「ま」り「て」止「り」末「の」処「ハ」ば「よ」し「のを「き」
 と「本」末「結」ぶ「る」な「り」と「云」ん「ぞ」よ「ろ」し「か」る「べ」き「ま」て「ハ」○「一」つ「の」に「と」を
 こ「に」出「ま」る「ハ」今「次」の「二」首「ま」て「も」う「ろ」へ「き」致

○「ま」が「き」つ「る」方「を」ま「ま」る「ま」げ「ら」ぶ「ん」本「を」終「る」の「の」ち「り」とま「が」よ「ル」
 △「是」ハ「ち」り「と」ち「り」ま「が」よ「し」と「云」ふ「と」ま「ま」る「ま」げ「ら」ぶ「ん」を「次」に「引」る「其」之「系」乃「お
 と」ま「が」よ「し」こ「ろ」を「あ」き「致」し「ら」む「ち」るとま「が」よ「し」こ「ろ」な「り」乃「し

といへるとハ聊異なるやうなり、ちろハ截断言なれば「びび」と「まがよハちり」と「は」る「べ」く「思」え「る」を「ち」ろ「ハ」連「用」云「ふ」
 れ「び」び「り」と「ま」が「よ」ハ「お」ぢ「り」ま「が」よ「の」ま「ま」る「な」ら「ん」は「ま」ま「の」二「首」ハ「二」つ「お」糸「を」ワ「け」て「示」さ「べ」き「致
 さ「て」又「被」仙「家」系「二」家持「ふ」又「聊」異「し」て「此」類「の」也「有」次「に」云「べ」し、
 ○「ま」が「き」つ「る」云「え」ち「り」とま「が」よ「ル」

△上「に」云「へ」る「如」く「こ」ハ「ち」り「と」ち「り」ま「が」よ「し」と「云」ふ「な」ら「ん」を「斯」く「詞
 を「か」さ「し」ハ「せ」む「を」な「ら」か「さ」ね「い」へ「る」と「同」く「そ」の「ま」ま「を」つ「よ」く「云」へ「る」ハ
 一「つ」の「ま」な「り」こ「の」ま「ま」右「云」や「う」に「詞」を「か」さ「し」云「間」小「お」か「ら」る「ハ」お「つ」て「そ」の「こ
 と」を「つ」よ「く」云「へ」る「な」り「但」し「ま」る「ま」の「云」ま「ま」き「ハ」其「か」さ「ね」詞「ま」ま「の」
 一「つ」ハ「躰」小「な」り「と」云「ひ」次「の」一「つ」ハ「用」こ「を」云「へ」る「な」れ「バ」間「に」ま「ま」り「か
 くて「た」に「ら」ま「の」い「へ」る「と」ハ「其」趣「き」少「し」同「か」ら「む」抑「間」小「ま」ま「り

なべてとハぬもくして「な」云こととまべて野しきそれを云ふなる
 を其留へいそゆると。れどをたるハぬちと。多ちふし。内きと。さく。を
 ど云へるこれなり。このハ。ふといへるも互小似通ふなり。そハいふちふ
 多つ内きふ。さきなどろよハ。ま。ぬきふそぬきし。むハかま。う。ば
 とやうにいづると。内るにぬれ。ぬれぬる云のま。ハうをま。う。だふ
 ち。ま。も。う。か。ん。伊勢集四十六と云へるを合せ考るに。いづれもぬき
 たる」と云ふことをつう云へるなり。さ。この。を。の。り。へ。出。し
 又小を此下二十わ。う。へ。出。し。て。か。れ。も。こ。れ。も。○。一。つ。の。と。○。一。つ。の。ホ
 と標して。示し。つ。べき。と。これハ。あ。ふ。なり。猶。う。考。ふ。べし。伊勢集下
加こま
も。た。ち。し。ま。に。し。る。き。あ。よ。ハ。ま
 と。か。い。ま。も。う。ひ。を。な。う。ら。ま。 さ。上。の。件。小。引。古。今。五。本。と。此。の。の。

ちり。と。ま。が。ふ。ふ。ハ。今。一。説。松。林。翁。ハ。て。を。に。誤。ま。れ。る。よ。て。ち。り。て
 ま。ふ。ふ。なり。と。これハ。わ。や。う。に。き。こ。也。とい。を。れ。と。な。れ。た
 今。案。を。と。く。ハ。此。説。用。の。も。つ。る。べ。し。され。ど。ち。り。と。ち。り。ま。が。ふ
 と。これ。バ。が。と。あ。う。ま。い。の。述。つ。う。か。り。て。又。よ。き。や。う。も。思
 え。る。か。り。お。く。に。い。ふ。万。二。の。四。小。鴨。山。の。云
 不。知。等。の。等。の。さ。め。を。も。考。べ。
 ○あ。い。ふ。あ。ふ。云。え。ち。り。と。ま。が。ふ
 △上。に。云。へ。る。如。く。ち。り。と。ち。り。と。ハ。怒。る。を。用。に。云。へ。る。と。辨。小
 志。を。云。へ。る。の。け。ぢ。め。の。を。此。用。よ。て。云。へ。る。さ。偏。ハ。何。と。な。う。そ
 志。を。受。る。詞。か。く。ま。が。ふ。と。ふ。と。云。へ。る。ハ。用。語。な。を。を。れ。を。を。又。辨
 云。に。云。ひ。な。り。て。受。と。る。り。り。そ。ハ。家。持。集廿あ。い。ふ。と。さ。う。を。ま。つ

て有べくおもえりたり、上に云る如く如まうの誤をぢりばの誤とまゐるもよきやうなるまじりてそれと別の活勢とハぢりまゐるがうかく不知而のまゝと云ふと云へるも有をまよ誤不知等妹之をも御風季鷹まると云ふと云へる訓めり万葉類句にまゐる

○おちよ我と跡上を切る格乃辞云云

△此と殊ふよき急得並へきなり是につき終るにさごめりせりと見えきとを所れそハ既く二笔ハ小変格とてふる君弦みのしろごろを云おごろうれぬるの類あまを示せる如くして此と受るよもその切る格乃辞をさびとづく格の辞にて有りかぐしと受ること有とも云べき事と思也但中勢集あるあまりあてくひ有なりと思身を恨てふる人やんるらんのおれふる^{玉緒二の}とちどを彼^{十丁より}源氏及袴あるいもせ山云云あままといひらるの

如く且例と恒例の格もつれざる也と思ひしうどさ終りてハ非り及び事既^{は巻}ハ下おも云つれど尚云人雑話(四六)条又引出し吉哥どもの中ハ中勢集のハ右云へる如く也又伊勢物語のを初め多くハ誤写と云べきともう所れながらのあつと云へるといひらんハハと語格は精くぬ誤と謂べきもぞ有らるべ外と[□]且例と連躰言を[□]と受る例ハ有る也活語餘論ハ卷二莊周が夢ハ胡蝶とありしといへる[□]と書る文のこと云へる條云云ふが如く[□]とて此あつりへ

△○一このと[□]と書て出まべき類ひハ有るねど序にいせん本宗の和讀ハワレコレ故佛トアラハレテと云ふとの有歟と文字ふと

これハかゝる用ひさまの例知きかゝきに似せきど、これハ恒のこ
かり、然るにアラハレと云云を示現・化現・たゞの様にさるか
に、こゝをばえ易うべしなり、是ハアラハレハ露頭と云んが
如し、古事記或ハ壘囊抄に徴して辨せること、有人の語辞林香

記の如し、後云ハ、故仏ナハト云一カ
と後誤してはよらん

○やを免辞ルおくを

△此をり、さるときハその末の例大方ハ略図といへる希求
の詞、又ハ將然云をうくるん、ていひとむるぞまづハ舟の格
りから、玉錯に引をるを、んをを、いを、えを、い
を、いんなど考ふべく、此外もんとを又けせてへめれ

或ハ祢、又よこそせの十二のうち、款まで應むる例とをむ
えり、さて休め辞たるて、勿論自ら、希求云をて應せるハ、らに
もいん、んと應せるも亦聊歎息を舍めり、そ越も下の意ト
やうのとも、し古書どもを視て、ことるべし、抑下知希求を
ど云ふべき、詞ハ、まハハ衛上九又十五下五小みえたる如く、四段の
活きのけせてへめ、又加行奈行の変格の活のこ祢、そハ二段中二段
下二段依行変格、それらの活きの連用云に添へるより、是たるん
そ外ハかゝる活きの連用云に、ここそせなどいひ添へるをも
知希求と云ふべし、秋風よくとかりにげこそ、ふるの差よかくて此希求の詞、
まづて、けせて祢へめ、をつきをええ、ここそせなどいひ添へるをも、
ある中、いんやをめ辞のを、受けたるまえ

いつも此十一の希求の訓と彼人の十二にて相結ぶてくぞ思はる、
 但し来往などくを意したるをおがえぬハさるりのこそ四段の活き
 訓等の中よりせてめの三つなるハ今思ひつらざれど此せてめ和
 こつ此外ハ何れもその例をてに明なり其けへまよの四つハ此
 玉緒に出さる事どもこそ先づつべし、
 今一つこそにて忘らさる例ハ万葉五十一現ルたあふよしもなるぬ
 を玉のよるのいめ仁越つきて見延許曾と有など是なり、
 のをハ心その末に希求語らんくはる格なりとさしてこれハ此書次下十九○尔こふふ
 をと出せる古六の奇なども、たごのこひくハ下よをおりい、全く日例と云ふべき欲
 ともろひくどなホさよハ下つさるなるこそ
 もいと細うたるところを下に至て委く云べし、
 といひく掃ハ人も下知のと世間いもゆる訓どももなきもつらり、万十二十九引つ

せみの人めしげくたぬさよの夜夢乎次而所見欲ヨル是らなり、た
 是をかくしよまかと訓ハ、仙覚本に然るに从へるなれど、又思ふに欲
 ハむに當る正字なれば、所見欲を三エナんと訓むべきよもや、
 さ訓ていよく能きこゆる奇なる、然らバをの照応いたゆる人、
 てあなれば此やをめれをハ、九てけせて終へめれてよこそ、
 二こそ應むといよく限り云へくや、
 ○尔こふふを
 △此條か、標目ハ一つこそ、その尔こふふを、尔三つつらり、抑それ
 に思ハ、此一條ハ除くへきう、いふよとならハ、てにわたる二首中、ま
 づ其一つ、古六の、花乃いろも若りまどまてのハ、上にいふゆるやを

免辞ルおくをよそあひしくハまこ小をおりべと同例はおへのへ
 して忘ぜるやまめのをならんまぐてやまめのをハ必その下にんよ
 けせて忘へめまここそこせの辞りて忘をるしたりと思ひしう
 ど今又考るにいもゆるやまめのをハてつ小こなどようつである
 大うこの定りなり但してハ明に多行下二段活の用云の例也此外
 にも今作人哥にまぐて連用云をも此をまぐてうけてよけんさそて其
 てついふこををと交する例ハ此卷十八丁たるどもをみくまるべし
 凡て勅をとやうに辨云のさごうなるようだに休めのをへつゞる
 例ホご又及バむと云べきうとわりふがうへ小伊勢集なる文統後并
 にも出るる彼林の花考にだよふはへままて傳るあらむよまま

ぐ小免をと有ハ已にふりド狀古今たるかをごふふハのふいとこ
 うおおえたりざれバ次に引る後於のカをえて人をさうれましうバと
 け小たぐへて小に免ふをと云ハよままさごめたりり但しあらふに
 免ふ中うそ古今のと後於のハ又聊のけぢめハらるとくハ後おも
 へるたり其故ハ後於ハみやこいづる云まま又て人をさうれましうハ
 免ハりとの古六のカをとふのをと免バへ異なり免ハた今も人
 をさうれけるなどをりいへるめくふと云ふべき処のやうたれど小
 といへるとハ差別ある処ハ用ふをなりさハおこる免ふをと一むきに
 のこハ云ふまぐこハよといふへきに似て後ときあるをなどのひこ
 らんやよからんかく此後於のハ異なる免き者まぐ古今のハたへへかまるやまめ
のこハとれバ別に○ふままをと一条ハせをハとも思ひしまれ

木へ」とハ全く同き一ハあらねば、そに秋を」と云へるこのと云詞
 ハ後拾のをのこへうけてまべし、後拾のに同きが古今集詞書にと
 云ふハ、いふさうあて人をまかをける時小き、吾母山の本よりまて人
 をまうるとして、是らのてたるべしこハ母に、君がまくれをまめ
 よと、これハ送別なり、苗別ならハ人まくれと云ひて、をとハ云
 ふまどきたうりと、期く留別と送別ををと、をとハのけぢめ、何
とハ誰も大く、さうめり、あくれども然ひとぶるにハ云ひが、これち
り、甚故ハまづ、費之素に、むさうう位、るあをま、ととハわ
 へうつるに、まへまへひ、ああねと、ををのりて、一本一ハ、松松作
書して、この詞去明くに、我りまて、やに、何何と、白白と、又又と、何何と、詞詞
てあ、いいハ、ここハ、苗苗別、ここそ、何何れ、何何と、白白と、又又と、何何と、詞詞

松と竹と秋いままどまうると有こを考みべし、松竹ハのこるなり
 されハおくたり、あうるに、松と竹と、いとハ云ひた、むさて万葉へ
 廻りて見ると、二十卷廿、たち孫の母乎、まこと、これ旅の
うり本に、やまく移人か也、乎の字、コとよめるに、いひてハ、ハハ
母子と云て、大云ハ、れれと、然然と、にに、いり、ふれど
 古今遠鏡小附註せる千秋の説の如く、何ながちに、何をまれたし
 とのこも云べううづるなり、その趣きハ、まかに心を用みバ、おのづく
 明なるべし、苗別もをこ必云まぎきと也、いふ云べきと、何ハ、送別も
 さやうなり、ふれバ、その別ハ、何たきに、何と知べし、
 ○一のを
 △古七云同十五云、これも、これさき一ハ、古七なるハ、何がら何なる

る物をの意十のハ何よくをこひ返はしし信白にかる廻らふ小て
 別小つのををと云べくも何らどうと思ハマらうりき元補集およ
 おとをを志むくもあれハ白書のつりも多ひしきえぞ志ねへき公
 忠集あおとををよくにつて入てれれ木のあのかきをあまこひもま
 ろう如蜻蛉日記末に意をたりひつてあひつてハ林一あおとスる友
 ををあめハ悔一かりらをを何もも指云事も物もなきをを
 りをてハ別に○志を一のををと云ハごろと終ハごろまり期て又思
 に塵をたしを志むとぞ思ふ古々ましよめるたいも塵をすましと
 かるとえんよりハ切りごとするどうと云ふ意ををハ何よこと
 ををくく此たどの小同と云へき致さて致切りへ又○一のをを

ときを今一條加ふべき致、又ハ○よといふ一何なるを、とやうに出
 てもよりんうとあふとりの尤の如し、

代神 やらもたのいつもハ重經つまめ小やうきつらもやう致を

四十 ねもつたふ志くれのるハ隆くれと天ををれて月夜法局

二十 あり川の山より物ら月まのく人よまひひていもまのれ乎

十一 後 これをみよ人もまをこめぬ志まらて終を何虫けあまらまら

ううやうに一條加へてよりん但一万十二のハ或れを妹行つ後摺の

ハ、おがをえよと上へ返るふてつねのをたりとも思つんう志か

一ハ、一、七巻廿八ハ、一、一、一條を示せる、即これか、れ、一、万十ある

え、上へ返るとも云ふまうくしてた、歎辭、の、お、か、ま、を、と、何、ひ、た、く

○其のきり分

○施丹

○かのきとゆふに近き云云

△**坎**きかく云 **加**さうぬ **尔** などの云ハ俗云のノニと云に當ると

云てよけん、憂喜いづれも歎息の意を會うらう味ふべし、

知と云次へ語訳セバソレニアと云倍云をそへてミレバを得易し、

○なぐく云

△**こハ** **ぬ** **尔** をのべさうりのとのを教く人多れどさのミハ

比、北迦成章のあゆむ抄小 **ウカヤ** **又** **コト** **云** **モ** **セ** **又** **ノ** **ニ** 移り語訳せら

やういよしとくに引たる古今集の五首のたぐいづれもぬと

て安ゆれど、日集奇も、ウカヤとあそぶべきを、をいぬどもと

まうちくになど、意をつけてさうべし、万十一 **セ** **ハ** **ミ** **サ** **モ** **子** **ノ** **意** **ト** **モ**

へなみ羨さんとそれハたりと イナレナクニ 不所寐 **是** **ら** **ぬ** **尔** **なり** **と** **の** **ミ** **ハ** **云**

おきが 活雜(七)の
条に詳し

○な **尔**

△**尔** **ハ** **凡** **テ** **ナ** **レ** **然** **ル** **ニ** **ア** **ト** **諺** **訳** **志** **テ** **レ** **バ** **よ** **ク** **サ** **ユ** **ル** **ナ** **リ**

活語指南初卷 六 **考** **合** **志** **ト** **シ** **天** **德** **奇** **合** **友** **州** 忠 **見** **た** **つ** **州** **の** **中** **を** **考**

けりき **レ** **け** **テ** **ウ** **ル** **人** **ナ** **リ** **尔** **志** **々** **ル** **也** **ハ** **是** **ら** **ハ** **件** **の** **諺** **訳** **當** **ら** **ぬ**

や **レ** **能** **レ** **バ** **狩** 前人あふ志々も患いけりさる方もられ
考けき日ハ依て前人なし其ノまはと云ふ也 **日** **意** **也**

○一つの **尔**

△**ま** **ぎ** **又** **ぬ** **人** **尔** **ち** **く** **ま** **く** **も** **を** **ハ** **ノ** **タ** **メ** **ト** **訳** **志** **テ** **ル** **ぬ** **人** **の** **ミ** **メ**

こちくまぐもを **ハ** **の** **意** **ナ** **リ** **ト** **云** **ベ** **レ** **た** **タ** **メ** **と** **の** **ミ** **訳** **志** **テ** **ル**

もろり、万十五九あを小よりまろりのまあにゆく人もかも州松まむ
 け丹のこまをつけん小又かへるさかいもよみせん小わさけみ
 のおきつまろり玉切りひてゆま、是らの小ハハ為とあてまきには
 らげや、又栄哥合恋元能因能因髪のももかろりぬまのそまざぬ人
小糸ぞをぬ糸、この小ハ、殊右に云へる如く、人の為はとて
 まざれハ、まえ小くそおもえろり

右一升

○二つの小、このまろりへ今一つ、○二つの小とあそぬも小そぬも
 一など云へるを出しそよりんとあより上十五○二つのどの処下云
 へるが如く、神身肉もそハあ糸もいかなれやあるとたぬま小こ
 そあれ順集揃むあり、まろりまろりみる人の衣ぬろりきまろりたろり

小葉之、然らなかりさそと云ふに色へるやうなう、然り小ふ
 同きとこ、なとれ小と、こハそのことを、つろりやろり、とハ又異たるけり、花と
 してをらんをまれば、などいへると大方同じきに似たるを、花小
 みてとやうに云へるなざれば、小色へるに似てる中、そ、又二つ
 の別を、けり、とハ云なろり、さそ、又今一つ、○二つの小、万葉三卷廿今
 代、よ、あ、ハ、来、ん、よ、ハ、奥、コ、鳥、小、も、ま、れ、ハ、成、な、ん、小、小、ろ、り
 たる、ハ、た、ろ、れ、と、も、を、一、つ、云、ひ、て、二、つ、の、小、コ、及、お、せ、る、な、り、さ、そ
 又、一、つ、○於送、ま、ろ、り、く、小、お、た、れ、り、ま、ど、ま、ど、だ、く、み、う、つ、ま、ま、な、も、の
 た、ど、ま、ま、ろ、り、小、ま、ろ、り、た、る、小、ハ、あ、ら、ね、ど、云、ひ、さ、そ、
 の、こ、ろ、ま、ま、を、含、め、た、る、を、ま、ろ、り、の、例、と、や、云、ふ、へ、ろ、り、ん、さ、そ、又、一、つ、

○吾をハミ花ハミふみハミなど云つるハハミにハミ似ハミるなり、ハミ共ハミも云むりて
 ちけハミバハミりハミれハミるハミなハミらハミぬハミどハミさハミまハミ二ハミつ、○万ハミ六ハミ十ハミ山ハミ高ハミ三ハミ白ハミ木ハミ綿ハミ
 花ハミ落ハミ多ハミ藝ハミ云ハミ追ハミ瀧ハミ之ハミ河ハミ内ハミ者ハミ雖ハミ見ハミ不ハミ飽ハミ香ハミ聞ハミ同ハミ右ハミ泊ハミ瀬ハミ女ハミ造ハミ木ハミ綿ハミ花ハミ
 三ハミ吉ハミ野ハミ瀧ハミ乃ハミ水ハミ沫ハミ閉ハミ來ハミ受ハミ屋ハミ是ハミらハミハハミ花ハミのハミ如ハミはハミとハミ云ハミひハミ水ハミ沫ハミのハミ如ハミはハミとハミ
 云ハミべきハミ飲ハミ、ハミあハミいハミやハミ花ハミのハミとハミ、ハミ瀧ハミのハミまハミるハミのハミいハミよハミめハミバハミ、ハミ例ハミのハミのハミ如ハミくハミのハミのハミなハミりハミ、ハミさハミれハミ
ハミ小ハミ有ハミとハミ云ハミ、ハミ同ハミ十ハミ、ハミ又ハミ十ハミ二ハミ、ハミ小ハミ朝ハミ影ハミ爾ハミ吾ハミ者ハミ成ハミ奴ハミ、ハミ衣ハミ云ハミひハミさハミくハミたハミれハミいハミ、ハミ是ハミ
ハミらハミもハミ糸ハミのハミ如ハミくハミなり、

○はハミのハミのハミてハミハハミとハミ貯ハミるハミとハミまハミり

△是ハミハハミうハミごハミうハミぬハミてハミをハミ云ハミたハミるハミへハミいハミぐハミてハミ云ハミまハミとハミのハミてハミハハミつハミつハミるハミれハミ
 とハミ活ハミ用ハミまハミるハミとハミなハミきハミたハミりハミ、ハミそハミれハミをハミつハミねハミのハミてハミとハミ云ハミへハミるハミまハミめハミりハミ、ハミ次ハミイハミ○

てハミきハミ云ハミとハミ云ハミへハミるハミハハミ、ハミ捨ハミてハミ交ハミてハミなハミどハミのハミてハミとハミ同ハミくハミ、ハミ多ハミ行ハミ下ハミ二ハミ段ハミのハミ一ハミ乃ハミ
 活ハミ語ハミなハミりハミ、ハミ此ハミてハミハハミてハミいハミがハミなハミどハミ云ハミまハミれハミ、ハミそハミのハミ初ハミぬハミてハミハハミ然ハミらハミぶハミるハミあハミてハミ
 活ハミ雜ハミ三ハミ編ハミ、ハミにハミまハミべハミてハミはハミいハミをハミたハミのハミ四ハミつハミのハミうハミごハミくハミとハミ初ハミめハミぬハミとハミのハミとハミ
 いハミへハミるハミ処ハミをハミいハミてハミ明ハミらハミむハミべハミい、

○ふハミて

△爰ハミにハミ出ハミせハミるハミ九ハミ首ハミのハミおハミてハミハハミ上ハミにハミをハミとハミ云ハミてハミふハミてハミとハミ云ハミへハミるハミ、ハミげハミふハミ一ハミつハミのハミ
 格ハミとハミ因ハミ由ハミるハミをハミ、ハミこのハミおハミてハミハハミ皆ハミ辨ハミ語ハミをハミ交ハミへハミるハミなハミりハミ、ハミいハミとハミハハミ用ハミ語ハミとハミもハミ
 そハミをハミ辨ハミ云ハミとハミまハミてハミ、ハミそハミれハミ交ハミるハミなハミりハミ、ハミいハミとハミいハミはハミ辨ハミ語ハミがハミをハミちハミきハミりハミ、ハミおハミてハミ
 ふハミどハミ辨ハミりハミをハミ、ハミ刃ハミのハミ思ハミひハミ、ハミおハミてハミなハミどハミ、ハミいハミれハミもハミ屋ハミふハミりハミるハミとハミ、ハミをハミあハミるハミべハミ
 尔ハミてハミいハミのハミちハミぶハミさハミをハミ、ハミおハミむハミ、ハミおハミてハミなハミどハミ、ハミ同ハミきハミよハミてハミ曉ハミるハミべハミしハミ、ハミさハミてハミ共ハミ

外に、おひ 勢 な ど を バ 狩 り の 用 語 の ま う 小 て 其 を お て と
え る 有 さ そ て 其 ル ハ ち ぬ ぬ る ぬ ま と 活 く 彼
六卷五丁に「つ」と並ぶ
ぶぬると云へる是なり
り あ り な ど 云 へ ス ル よ て の つ つ た れ る な り さ る 例 に 云 ひ も て
ゆ け バ 一 つ ふ も お ち ぬ べ ル れ ど 始 り け ち め な し と ハ お ふ ま う ド 死
な り お り き き お て 何 く お ひ 入 お て な ど 文 章 も 少 う ら ん ど さ
る ハ 皆 上 小 を と か る と な く あ て な れ バ い ち あ る み づ け り つ り を
才 の お ひ お て な ど 必 を と か ま る の よ ハ 又 な れ る と あ る し
と や 云 ふ べ う ら ん

○でハお い つ て の 活 き ま り と る 辞 と つ の で あ ら る と な り

△上ニ 十 右 小 活 き の で と 云 へ る ハ 上 に 云 つ る 如 く 初 ぬ て の と 今 あ ハ 小

つの で と 云 ふ ハ そ れ と か ち り て ち で を 一 つ 別 に 云 ふ 故 そ れ

に對して自余ので を つ ね の で と 云 へ る もの と も 也 然 も 尤 も ハ 上 く

考まバ 何 れ 名 け さ は た り 濁 ら ぬ て 一 ハ 初 く 初 く ぬ 二 つ 何 れ ど

濁も し る で ハ い づ れ も こ ど ぐ く 諸 活 用 云 の 諸 將 云

但一略四不諸活語乃
四十何れと云へる中、
燕字標せるより不字までの四と、將字に當る三と、ハセセセを除きて、有字即せる
より、去字かゝるまでの卅三、それも和行のみうううれあよの一を数へざるは、
卅二の活用ある、この卅二の活用云の、その
將然云をいま概して諸將云ハ云ふなり、 を 受 る 定 格 と て こ れ め と ず し て

の約り、其ず ハ 初 ぬ わ の 用 ら き そ の 一 ハ せ あ す す る す れ の 活 き

そのて ハ て つ つ つ の 活 ら き 故 に で ハ い つ よ て も 用 言 へ つ ぐ く

云う そ 、 元 来 一 の 活 用 語 な り ざ れ バ こ の 約 ま り の で ハ 上 の 清 音 の

ての 如 く に 恒 の と 云 へ バ と て 別 小 初 く と 初 ぬ と あ る 一 ハ 非 る

ハ必しも將然云を受くることろえ、ハ去の將然云なることをよ
くことろゆまへきあつたり、

○な

△此廿四丁元より廿五右くけて示せるハ皆歎息の意よりて、この下
九ナ出る上と曰く意をへたれど、上ハ去へて連駢云をうけたハま
べて截断言をうく契りきを契り志上とハ云へく契り上な
とハ云ふましくナをうく上とハ云をれど、ナがなナきナ
とハ云へくがなナきナとハ云まナき類ひ、ナ考へるべし、
別ナよナおナりナまナらナるナにナいナつナれナにナいナてもナハナ其ナふナりナ
あナりナたナものナりナよりナ截ナるナとナ連ナくナとナをナかナめナたナるナかナれナとナて

かようくに截断言につく歎息の声ハななりたとい連駢云ナもナぞ
のやナなナとナにナ掛ナりナてナ截ナまナるナ、或ハ已然言ナてもナ去ナにナうナりナてナ断ナト
たるをりハ、此ナなナるナるナとナり、ナ源ナ氏ナ夕ナ息ナ、ナうナとナとナそナひナとナれナるナ、又
紅葉賀ナ小ナのナ試ナ系ナハナ去ナ海ナ波ナマナ事ナ皆ナつナきナぬナ、ナよくナ辨ナ子ナへナきナことナそ、
○ハ截断の標○ハ連駢の
印○ハ西用の意をいなり、猶下上の
小云ふべし、

○勿れまのな

△このまのナハ、活語指南初卷三もよくまへし、凡そ用ひさぬ二つを
中ナとナて、ナくナハナ莫ナ出ナその類たるのナ出ナ志ナて、ナ孫ナむナりナ此ナ衣ナいろナふナいナつ
なナるナ免ナの類のナハ、ナあナれナとナるナとナてナ省ナきナてナ出ナさナぬナなナめナりナ、ナされどナ今ナ其
ことをも初学の為に云もん、その勿莫ハ皆截断云ナをナ受ナるナ例ナを

り、俗云一ハ異なり、俗一ハ大匠畧必たる搏用示一の段を一段より
 て連用云をうけていづるをいでる觸るをふれを、又おつるを
 ちを掴むをねを、又何るをふるを、又ねを、又ね一云
 ひ或ハ一段下りて連射云を交ていづるをいづるを、又ねを、
 いぬをいぬるを、おつるを、おつるを、おつるを、おつるを、
 いちこまろひて、漢一落る、まるとえたる如きハ奇なり、りハ写
 誤り、りハ作者の廉心よりなる、凡そ禁止辞の莫ハ作用云の限
 り、その自辨截断する云を交る定りなり、但し此勿のちハ形状云へ
 ハ及も、形状云までもへ及ひてまづて截断云をうくるハ、歎息の
 ちなり、略必一りこのとり、せるたのちに改正の圖一ハ補入して

とたしやのつゝ、よもなと出せり、さて件りの作用云截断する処
 を受るたを、今世も田舎人ハ四段の活き云のかぎりハ大々古語乃
 りに云を、京一てハことごとく其のやゝむるに非るなり、連用云
 をうけて、或ハえ、或ハやをそへて云ふ、やゝをぬき、えい、
 いひ、やゝと云類いと俗びにさゝびり、さるハこに出せる、ふき
 ち、ちと、そ、なく云、つ、のと、お、つ、に、な、れ、り、か、る、と、を、も、つ、い、で
 に、こ、ろ、え、ま、て、よ、け、ん、滋、や、め、を、何、そ、と、云、へ、る、ハ、作、用、云、形、状、云
 とも、に、連、用、の、処、を、ち、と、交、て、次、小、ま、く、連、用、云、し、て、そ、の、を、を、う、き
 て、ふ、き、ち、と、し、そ、拂、ひ、ち、を、て、そ、と、や、う、に、云、た、る、を、そ、ハ、作、用、の、こ
 して、形、状、云、を、ハ、ち、何、く、そ、な、何、く、そ、と、ハ、い、ま、げ、形、状、言、も、①韻の

めたりらん本も何るに類せるとなるべしやハ

○一つのみ

△此みハ玉敷小何るやハ大くハたさハ無さこハうすハ序さふ
と志てだよこれバよく志えらるやうたれど又べななどハさ
のこもして又がさく又日どく志きの活き語の中ながらに如こ
と云こハきこえたぬなどのと活雅三編よくはしく論ぜる
をえて辨ふべし

○^後天の川せおあう浪ぬきまいたる後まきぬまのまろ
△^古此奇此かろハ次上の形をまつ次下のちりぬべこなど
とハたがひて苦しまん苦しみ苦む苦く^と活く語の方小て

云へるなりとたもなるニ毫のくり分よも云
こもとも考べし

○^古正^三何さ^三こも神をむつ^三免^{の左}こまハ後き而を云但し源
氏葵毫承^三減^三こま^三や^三云

△爰の説ハいもれなるもなりされど古十三の何さこ^三は^三於
後き処^三て^三彼^三交^三孝^三の志^三け^三み^三よ^三お^三あ^三る^三の^三み^三と^三同^三に^三源^三氏^三お^三語^三
志もそれるをこれバこハりよりその方にさるべき歎へるハやが
て古今撰者の紀氏まごはさ思さ^三れ^三よ^三や^三と^三思^三た^三く^三とも^三あ
ま^三バ^三な^三り^三其^三之^三集^三が^三り^三秋^三の^三田^三の^三布^三お^三い^三ぬ^三ま^三ハ^三う^三ち^三む^三れ^三て^三里
と^三不^三み^三よ^三そ^三か^三を^三ぞ^三あ^三よ^三ら^三る^三と^三思^三た^三ら^三と^三誓^三ひ^三日^三う^三聞^三き^三た^三こ
ろ^三た^三り^三片^三に^三云^三ん^三申^三勢^三集^三に^三ふ^三の^三志^三げ^三り^三を^三と^三け^三て^三呼^三麻^三を^三い^三う^三て^三り^三の^三人
ならん^三六^三ハ^三志^三げ^三み^三と^三有^三べ^三う^三志^三き^三処^三な^三れ^三ど^三か^三く^三ら^三る^三ハ^三集^三を^三辨^三小

むよ[□]な[□]どい[□]へ[□]る[□]例[□]も[□]有[□]く[□]なり[□]又[□]仰[□]ま[□]る[□]詞[□]も[□]そ[□]く[□]て[□]む[□]ま[□]え[□]は[□]ま[□]ど[□]
やうに[□]云[□]へ[□]る[□]こと[□]ハ[□]中[□]昔[□]より[□]ハ[□]を[□]さ[□]く[□]た[□]う[□]よ[□]と[□]必[□]云[□]や[□]う[□]り[□]なり[□]
「たり[□]か[□]く[□]さ[□]復[□]小[□]こ[□]ま[□]う[□]に[□]さ[□]む[□]む[□]び[□]き[□]と[□]持[□]た[□]れ[□]ど[□]大[□]う[□]を[□]さ[□]え[□]ん[□]
に[□]ハ[□]ち[□]と[□]よ[□]と[□]ハ[□]同[□]く[□]歎[□]息[□]な[□]る[□]を[□]截[□]る[□]詞[□]ハ[□]ち[□]と[□]い[□]ひ[□]連[□]く[□]よ[□]ハ[□]
よ[□]と[□]そ[□]あ[□]る[□]こと[□]と[□]さ[□]え[□]お[□]う[□]ん[□]よ[□]や[□]ま[□]ち[□]ハ[□]な[□]う[□]る[□]べ[□]し[□]持[□]云[□]べ[□]よ[□]ま[□]
と[□]ハ[□]云[□]へ[□]ど[□]な[□]よ[□]と[□]い[□]は[□]い[□]ま[□]ぬ[□]ハ[□]よ[□]ハ[□]つ[□]ぐ[□]く[□]詞[□]小[□]つ[□]き[□]な[□]ハ[□]き[□]ま[□]う[□]に[□]つ[□]け[□]バ[□]
ぞ[□]と[□]知[□]る[□]べ[□]し[□]、^引さ[□]る[□]な[□]よ[□]な[□]ど[□]の[□]ち[□]ハ[□]か[□]の[□]ま[□] なり、おひひ紛ふることある 但し[□]ま[□]ち[□]せ[□]り[□]あ[□]つ[□]る[□]ま[□]
き[□]の[□]ま[□]び[□]一[□]き[□]ハ[□]牙[□]を[□]つ[□]と[□]そ[□]ふ[□]人[□]の[□]あ[□]め[□]よ[□]ま[□]ど[□]ハ[□]ぬ[□]ハ[□]つ[□]ぐ[□]く[□]言[□]
な[□]れ[□]ど[□]の[□]小[□]わ[□]り[□]て[□]ハ[□]已[□]に[□]き[□]る[□]云[□]と[□]な[□]れ[□]る[□]を[□]持[□]よ[□]と[□]文[□]し[□]る[□]ハ[□]
い[□]う[□]に[□]と[□]い[□]ま[□]ん[□]う[□]これ[□]ハ[□]の[□]ハ[□]ぞ[□]や[□]伝[□]小[□]た[□]ぐ[□]へ[□]る[□]な[□]が[□]ぞ[□]や[□]伝[□]より[□]ハ

や[□]か[□]ろ[□]く[□]ま[□]を[□]後[□]に[□]追[□]き[□]ま[□]も[□]あ[□]る[□]を[□]り[□]い[□]つ[□]る[□]如[□]く[□]よ[□]と[□]そ[□]こ[□]
ら[□]も[□]の[□]一[□]ハ[□]應[□]じ[□]た[□]れ[□]ど[□]ぬ[□]ハ[□]の[□]つ[□]ぐ[□]く[□]か[□]こ[□]よ[□]と[□]そ[□]れ[□]を[□]よ[□]と[□]云[□]よ[□]
歎[□]息[□]の[□]ま[□]よ[□]と[□]そ[□]う[□]け[□]さ[□]る[□]の[□]と[□]知[□]る[□]べ[□]し[□]つ[□]ぐ[□]く[□]云[□]に[□]か[□]ぎ[□]れ[□]る[□]を[□]バ[□]
よ[□]と[□]う[□]け[□]さ[□]る[□]が[□]い[□]と[□]あ[□]る[□]き[□]ハ[□]順[□]集[□]小[□]茶[□]井[□]川[□]そ[□]の[□]い[□]も[□]あ[□]る[□]い[□]
て[□]て[□]の[□]み[□]ら[□]う[□]や[□]む[□]と[□]を[□] いまをおりよ、ま君とあるよ お[□]り[□]よ[□]よ[□]の[□]方[□]よ[□]と[□]ハ[□]連[□]持[□]に[□]
限[□]ら[□]ぬ[□]な[□]れ[□]ど[□]恋[□]つ[□]る[□]ハ[□]連[□]く[□]に[□]限[□]る[□]なり[□]、
○[□]マ[□]チ[□]よ[□]ま[□]云[□]
△[□]爰[□]小[□]十三[□]の[□]よ[□]を[□]出[□]せ[□]る[□]中[□]に[□]マ[□]チ[□]よ[□]の[□]を[□]よ[□]い[□]う[□]と[□]は[□]の[□]三[□]つ[□]ハ[□]呼[□]出[□]
し[□]の[□]よ[□]と[□]云[□]べ[□]く[□]お[□]ぎ[□]う[□]ど[□]よ[□]お[□]わ[□]し[□]ず[□]よ[□]お[□]ま[□]ま[□]ど[□]よ[□]う[□]ら[□]み[□]ど[□]よ[□]あ[□]の[□]ち[□]ど[□]
よ[□]わ[□]ま[□]れ[□]ど[□]よ[□]の[□]六[□]つ[□]ハ[□]歎[□]息[□]の[□]と[□]云[□]べ[□]く[□]お[□]ま[□]ま[□]ど[□]よ[□]お[□]り[□]よ[□]よ[□]の[□]ま[□]ま[□]

○玉のをくり分

○権ノ冊六

よぢらほまよの四つハ、希求言を採つてくまるとよなど云べし、其三つ云
ひりてゆけハ何れも皆歎息の了急小てさ事此異もつごめれと、右乃
如分ちも又べきまを、但しあつへばの二も彼四段の活言の才四音一
よを添しあり次冊七丁よ云人趣き考へ合はべし

○ようま

△爰に引る指三・狭衣・同の三首のようまに二つの別あり、拾三の如
いりりるようまハ、たゞ歎息なり、其ようま、今世俗言よも有り、諺と云
なる、芥木のに、いでその時の芥木ハ、楢楯松して有し、ようまと云へ
るが如し、ようま又なるかど何れも、連辭なるをようま、とくまなり、
さそかを免ようまきせようまと、狭衣よえたるなど、よハ希求
の云、それよちと歎きをそめて、希求をふうくせるなり、但し歎息

も希求も云ひりてゆけバ同ヒトともおつめれど、おいりりるようま
などをうち任せて希求とハ云べし、ぬおもむきまといよく毎ふ
べきとぞ、さてついでよ云えん、かく希求のよに歎息のちをつけ
てよちと云へるハ、雅語たれど、同ト歎息のまを、やをつけてよ
やと云ハ、正き奇文よハ、ミえむ、薄籍読に、懋哉、務学也、欽哉、など
を、ついでよちと訓きたうへるにひうれて、分たなどにそれを用ゐるこ
と勿也、薄籍読の、古語によく契ふと、わめと等ナドの、山口栗下巻小本の、
いつりなほ多くハ和読語路撒小詳よ、さハ珠、要らるテニハ、ハ、諸めそ、
○は祿ハ云ようま、ようまは祿よ云、まよくとわらべ
△凡て下知の詞小よ、りどそあるとハ、詞のハちまう、上九を、たふ説
の如く、古くハ下二段の活きよもよ、りどそ、ざり、例、らるを、万葉に

のまろ奇等^{ドモ}より古今・源氏・わろり迄の正統を考るに、先ハ其より^{ドモ}流
ざるハ四段の用き^{イナリ}、そのハ下二段の活と大く^{ドモ}別きより、^{但し源氏よりたぐ}
^{も宇津保ちどよ}

彼^{イナリ}活の才四音^{ドモ}よを添ふる^{イナリ}、然る^{ドモ}其後^{ドモ}ハ復彼四段の活といへる^{ドモ}詰等^{ドモ}の才四
源氏もをり^{ドモ}ハちき^{ドモ}より^{ドモ}

音にもより^{ドモ}流^{ドモ}するも少う^{ドモ}なれ^{ドモ}る^{ドモ}となれば^{ドモ}祢^{ドモ}よと云^{ドモ}この^{ドモ}の^{ドモ}の^{ドモ}

てその類ひと云へ^{ドモ}ばい^{ドモ}れぬ^{ドモ}べ^{ドモ}れ^{ドモ}ど^{ドモ}な^{ドモ}存^{ドモ}げ^{ドモ}ふ^{ドモ}よろ^{ドモ}き^{ドモ}こと^{ドモ}ハ

きこえ^{ドモ}む^{ドモ}さ^{ドモ}て又^{ドモ}この^{ドモ}作^{ドモ}まる^{ドモ}祢^{ドモ}ハ^{ドモ}さ^{ドモ}て^{ドモ}連^{ドモ}用^{ドモ}云^{ドモ}を受^{ドモ}くる^{ドモ}を^{ドモ}又^{ドモ}

つ^{ドモ}將^{ドモ}然^{ドモ}云^{ドモ}を^{ドモ}受^{ドモ}る^{ドモ}祢^{ドモ}より^{ドモ}そ^{ドモ}ハ^{ドモ}祢^{ドモ}あ^{ドモ}き^{ドモ}の^{ドモ}祢^{ドモ}と^{ドモ}云^{ドモ}へ^{ドモ}、^{ドモ}あ^{ドモ}ん^{ドモ}よ^{ドモ}も^{ドモ}預

意^{ドモ}の^{ドモ}ハ^{ドモ}さ^{ドモ}て^{ドモ}將^{ドモ}然^{ドモ}云^{ドモ}を^{ドモ}受^{ドモ}る^{ドモ}が^{ドモ}より^{ドモ}て^{ドモ}仰^{ドモ}まる^{ドモ}ハ^{ドモ}連^{ドモ}用^{ドモ}云^{ドモ}を^{ドモ}受^{ドモ}くる^{ドモ}

あ^{ドモ}ん^{ドモ}より^{ドモ}と^{ドモ}一^{ドモ}毫^{ドモ}の^{ドモ}り^{ドモ}分^{ドモ}ふ^{ドモ}云^{ドモ}へ^{ドモ}る^{ドモ}如^{ドモ}し^{ドモ}それ^{ドモ}と^{ドモ}合^{ドモ}せ^{ドモ}考^{ドモ}ふ^{ドモ}べ^{ドモ}し

活雜初編に弁訛有りこのあん
如のつづりよても各四編より

○やまめ祢の志

△此志^{ドモ}げ^{ドモ}小^{ドモ}ま^{ドモ}く^{ドモ}ハ^{ドモ}下^{ドモ}に^{ドモ}む^{ドモ}と^{ドモ}忘^{ドモ}む^{ドモ}但^{ドモ}し^{ドモ}それ^{ドモ}よ^{ドモ}三^{ドモ}つ^{ドモ}の^{ドモ}別^{ドモ}り^{ドモ}ハ^{ドモ}將^{ドモ}然^{ドモ}を^{ドモ}受^{ドモ}る

二^{ドモ}ハ^{ドモ}已^{ドモ}然^{ドモ}を^{ドモ}受^{ドモ}る^{ドモ}なり^{ドモ}爰^{ドモ}に^{ドモ}引^{ドモ}る^{ドモ}身^{ドモ}よ^{ドモ}て^{ドモ}云^{ドモ}を^{ドモ}古^{ドモ}二^{ドモ}まで^{ドモ}とい^{ドモ}ふ^{ドモ}い^{ドモ}ひ^{ドモ}ま^{ドモ}き

う^{ドモ}あ^{ドモ}る^{ドモ}乃^{ドモ}ぬ^{ドモ}ぬ^{ドモ}同^{ドモ}九^{ドモ}あり^{ドモ}志^{ドモ}あ^{ドモ}る^{ドモ}同^{ドモ}十^{ドモ}表^{ドモ}五^{ドモ}段^{ドモ}此^{ドモ}六^{ドモ}着^{ドモ}たる^{ドモ}ハ^{ドモ}將

然^{ドモ}云^{ドモ}は^{ドモ}文^{ドモ}を^{ドモ}へ^{ドモ}か^{ドモ}る^{ドモ}志^{ドモ}と^{ドモ}其^{ドモ}外^{ドモ}の^{ドモ}十一^{ドモ}そ^{ドモ}ある^{ドモ}志^{ドモ}も^{ドモ}皆^{ドモ}已^{ドモ}然^{ドモ}云^{ドモ}を^{ドモ}受^{ドモ}たる

を^{ドモ}へ^{ドモ}掛^{ドモ}を^{ドモ}す^{ドモ}、^{ドモ}此^{ドモ}將^{ドモ}然^{ドモ}云^{ドモ}を^{ドモ}て^{ドモ}兼^{ドモ}て^{ドモ}忘^{ドモ}せる^{ドモ}志^{ドモ}ハ^{ドモ}ど^{ドモ}よ^{ドモ}と^{ドモ}い^{ドモ}ふ^{ドモ}意^{ドモ}あり^{ドモ}、^{ドモ}已^{ドモ}然^{ドモ}云^{ドモ}
を^{ドモ}と^{ドモ}受^{ドモ}て^{ドモ}忘^{ドモ}せる^{ドモ}志^{ドモ}ハ^{ドモ}平^{ドモ}事^{ドモ}を^{ドモ}物^{ドモ}を^{ドモ}慥^{ドモ}と^{ドモ}云^{ドモ}定^{ドモ}る^{ドモ}疑^{ドモ}り^{ドモ}考^{ドモ}べ^{ドモ}し

○らうく

△同^{ドモ}ド^{ドモ}こ^{ドモ}の^{ドモ}旅^{ドモ}な^{ドモ}れ^{ドモ}ど^{ドモ}お^{ドモ}い^{ドモ}ら^{ドモ}く^{ドモ}ハ^{ドモ}老^{ドモ}と^{ドモ}云^{ドモ}て^{ドモ}に^{ドモ}た^{ドモ}ぐ^{ドモ}ら^{ドモ}く^{ドモ}と^{ドモ}云^{ドモ}ふ^{ドモ}こ^{ドモ}の

そ^{ドモ}ハ^{ドモ}ま^{ドモ}る^{ドモ}な^{ドモ}り^{ドモ}、^{ドモ}お^{ドモ}い^{ドモ}の^{ドモ}い^{ドモ}ハ^{ドモ}連^{ドモ}用^{ドモ}云^{ドモ}な^{ドモ}れ^{ドモ}ハ^{ドモ}辨^{ドモ}云^{ドモ}ふ^{ドモ}も^{ドモ}云^{ドモ}ひ^{ドモ}な^{ドモ}る^{ドモ}格^{ドモ}ち^{ドモ}り

又^{ドモ}こ^{ドモ}ら^{ドモ}く^{ドモ}ハ^{ドモ}、^{ドモ}そ^{ドモ}の^{ドモ}お^{ドモ}い^{ドモ}ら^{ドモ}く^{ドモ}の^{ドモ}例^{ドモ}な^{ドモ}る^{ドモ}ハ^{ドモ}こ^{ドモ}ひ^{ドモ}ら^{ドモ}く^{ドモ}と^{ドモ}有^{ドモ}べき^{ドモ}に^{ドモ}ふ^{ドモ}り^{ドモ}

ハ截断言たるを交てこからく^〇と云へりさて又^〇らくハ又かちりて
 又ハ連用云なれば^〇いらくの例ともきこゆるやうなれどもハる。乃
 延たりたるともいへるべし^〇 まさしくるをのべてらくといふならんとももこ
 るハ万十、天川云よのあけぬら^〇いと云へるまじり
 かまハ老ハおゆるとをいへ^〇おゆるとハさういひをされば^〇たいらく
 をおゆるの延ハまるとハきハめて云ふべう^〇ざるそれとハうはつた
 ありさて又^〇いらくの^〇ら^〇ら^〇の^〇乃て小をけして^〇けい^〇れば
 此らくハ用の語^〇ハ^〇ら^〇ら^〇ら^〇とも思はる^〇 但しこれ^〇付て、山口葉をふとが
 めて^〇をらくハ^〇ら^〇ら^〇ら^〇お^〇ら^〇ら^〇ら^〇を
 万葉をあやまりよを^〇いらくと云へる^〇ハ^〇び^〇り^〇て、古今たど^〇ハ^〇い^〇らく^〇といひて
 あれどみちひが^〇なる^〇悉^〇らく^〇ぬ^〇ら^〇な^〇と^〇り^〇く^〇同例なるをやと云へる人^〇有
 り^〇き^〇け^〇ど^〇直^〇か^〇今^〇一^〇き^〇ら^〇く^〇ハ^〇き^〇舟^〇語^〇を^〇使^〇ん^〇ま^〇で^〇ハ、
 さの^〇こ^〇り^〇て^〇い^〇ま^〇で^〇え^〇服^〇ら^〇ぬ^〇と^〇思^〇た^〇る^〇心^〇の^〇お^〇ま^〇り^〇や、
 又^〇思^〇ふ^〇に^〇らく^〇ハ^〇り^〇と
 ら^〇の^〇活^〇き^〇、^〇連^〇用^〇云^〇な^〇る^〇か^〇ら^〇に^〇らく^〇とい^〇へ^〇る^〇ハ^〇例^〇の^〇躰^〇云^〇の^〇さ^〇ぬ^〇云^〇ひ

なせるおれ^〇の^〇とも^〇受^〇る^〇に^〇や^〇ら^〇ん^〇、^〇寛^〇未^〇た^〇げ^〇る^〇語^〇な^〇れ^〇ど^〇山^〇口^〇葉^〇下^〇巻^〇の
 る^〇これ^〇が^〇一^〇條^〇を^〇考^〇て^〇授^〇け^〇る^〇正^〇も^〇人^〇も^〇が^〇と^〇ぞ^〇孫^〇が^〇ふ^〇か^〇り、
 〇ま^〇く

△これハま^〇の^〇活^〇き^〇な^〇る^〇よ^〇、^〇上^〇 一巻四十五右
の^〇り^〇分^〇等 小も云ひ、略図^〇ハ^〇必^〇して^〇それ^〇受

る^〇辞^〇を^〇も^〇示^〇つ、^〇又^〇七^〇卷^〇卅^〇八^〇分^〇り^〇致^〇 又七卷卅八分り致
詞の^〇あ^〇い^〇い^〇ふ^〇き^〇た^〇り 万十一^〇今^〇も^〇あ^〇も^〇同^〇ち^〇り^〇め^〇そ^〇あ^〇む

み^〇ど^〇て^〇ま^〇ん^〇年^〇月^〇久^〇け^〇ま^〇く^〇に^〇、^〇又^〇同^〇二十^〇、^〇あ^〇も^〇と^〇ど^〇を^〇玉^〇に^〇も^〇が^〇も^〇や^〇い^〇て^〇ま

た^〇て^〇ま^〇づ^〇ら^〇此^〇中^〇に^〇あ^〇へ^〇ま^〇か^〇ま^〇く^〇と^〇有^〇た^〇ど^〇ハ、^〇ま^〇く^〇を^〇連^〇躰^〇云^〇こ^〇ら^〇る

に^〇截^〇断^〇言^〇受^〇る^〇も^〇して^〇う^〇け^〇これ^〇を、^〇な^〇ほ^〇く^〇あ^〇く^〇の^〇辭^〇を^〇の
核七卷卅八又考べし 此^〇ハ^〇入^〇ま^〇く^〇此^〇ハ

し^〇き^〇な^〇ど^〇づ^〇れ^〇用^〇云^〇を^〇辨^〇の^〇や^〇う^〇に^〇云^〇ひ^〇た^〇ら^〇ま^〇く^〇と^〇ハ^〇同^〇ト^〇か^〇ら^〇ぞ^〇く^〇し

けん^〇あ^〇へ^〇ま^〇く^〇む^〇と^〇云^〇を^〇の^〇む^〇へ^〇と^〇る^〇ま^〇や^〇ま^〇く^〇ハ^〇此^〇も^〇な^〇ら^〇ら^〇く^〇の^〇れ^〇も

きゝきぎハ云

△因小川出入古事記傳十九ハ云ハ伎マまク久クを古言小祁久宅云ハ許
右今集に世の中のうりくハ久キぬク云ルなどハ字ハ伎ハてハ伎ハを祁久ト云フ
ありきハ勝ケくハもナりナど云ハをハくハにて久ハを祁久ト云フなりハ何モ
も万葉ナど
ハいハるハ少シいクなりハ、美小加ク云ハへハをハまハえハれハど
まハぞハハハよキくハかハるハやハのみハまハてハらハまハどハあハまハきハくハもハなハりハなど云
ハるハもハいハとハやハまハくハまハえハらハれハどハさハてハハハきハくハと云ハハハ如ハ期ハこハとハ定
らぬハなりハ山口ハ采下卷ハ六ハ云ハへハるハこハとハりハ合ハせハ考ハふハべハしハ抑ハくハにハ引ハる
四首ハにハきハくハと云ハくハ五ハつハえハたハるハ中ハにハ古ハ十九ハのハあハまハきハくハ後ハ三ハのハをハし
きハくハ大ハ和ハ抽ハ語ハのハたハまハきハくハハハなハがハくハをハくハあハくハくハなりハとハだハり
いハハハまハをハなハらハきハこハもハ古ハ十九ハのハよハきハくハハハまハぞハハハのハ弦ハなハめハれハを

よハきハかハりハとハ稱ハけハバハそれハもハよハくハ通ハるハなりハ、又ハ古ハ十八ハのハうハきハくハハハ殊
にハりハきハくハなハりハとハ云ハてハ有ハべきハなりハ、然ハハハれハどハ此ハ類ハをハりハ給ハ
きハくハのハどハきハきハなハどハをハバハのハどハきハまハづハくハとハハハうハつハてハもハ云ハひハがハまハきハなハど
亦ハ男ハよハべきハとハなりハ、如ハ此ハまハバハきハくハとハ標ハしたハるハ処ハ小ハ出ハせハるハなハれハバハとハて
たハびハひハつハのハまハかハホハハハ者ハをハまハどハきハなりハ、凡テまハるハ心ハをハりハなハりハたハしハ
使ハまハくハをハ祁久ハをハ云ハとハいハつハれハどハきハくハをハきハ又ハくハ
と云ハハハ云ハハハぬハなりハと云ハてハ有ハべきハ久ハ考ハふハべハしハ、
○かハハハ切ハまハてハるハ辞ハのハ下ハにハ係ハるハあハくハをハ云ハ云ハ
△げハふハ志ハつハなハれハどハ今ハ少ハしハ初ハ学ハのハたハめハにハなハるハバハかハハハ截ハるハ辞ハの
下ハにハ係ハるハあハくハをハ云ハ云ハハハらハるハくハとハいハつハれハどハきハくハをハきハ又ハくハ又
てハ小ハをハまハのハ截ハるハこハとハのハ下ハにハもハ、又ハ希ハ求ハのハ辞ハのハ下ハにハもハ係ハるハこハとハを

滅やとおちえんて元補集を更に披る、うの校合こそ八件の年
 深きの奇くさ深き岩の朝芳うのいそむおほつちちくとあられ
 ぬへしとこえんさう初三四五の四句皆かたぬりさしてその詞りき
 左大将ひえへのありてかへりつちむえうりつちせれちえ
 くはうさうさうさうおぼつちたさうさう奇れ返りいそ
 傍に記せらハこれもかの猪苗代本の校合なりかかておほ
 つちちくぞとまてれぬかしてておをはたぐるおのりり
 てハなきさなり、詞書より一首のまてをよき考ふべし
 明なりとハいまこえささくねど印本よのこよりて
 ことなりとささめのもえまきまきとハさうさう人なる考へては

玉緒線分半卷

